2013年12月8日（日）東奥日報　20面掲載

理数系研究 熱意込め

弘大で3高校280人が発表

県高校理数系課題研究発表会が7日、弘前大学理工学部で行われた。五所川原高理数科、三本木高と八戸北高のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）クラスの1、2年生約280人が参加し、実験や調査などで導き出した研究成果を披露した。（大友麻紗子）

模型やスクリーンを用いて研究成果を発表する五所川原高の生徒

生徒たちは、数学・地学、物理、化学、生物の4分科会で、グループごとに授業や夏休みの課題などで取り組んだ研究内容を発表。弘大理工学部と農学生命科学部の教員が、実験方法や今後の研究の進め方を助言した。

化学分野では、八戸北高のチームが「柿渋を用いたストロンチウムの吸着・除去」について発表した。東京電力福島第1原発事故による汚染水に含まれる放射性ストロンチウムを除去する方法はないかと考え、柿渋を用いた重金属吸着の研究をしている八戸工業大の鶴田猛彦教授のアドバイスを得たという。

チームは、柿渋と硝酸ストロンチウム水溶液の水素イオン指数（pH）を調整して吸着の実験を行った結果、pH9で最も多くのストロンチウムが吸着されることが分かった―などと発表した。

実験を始めてからデータを得られるまで3カ月ほど試行錯誤したといい、同チームの八木巻大智君（2年）は「仲間や先生のおかげでうまくいった。いつか実用化されたらうれしい」と話していた。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が
　利用を許諾したものです。
[問合せ先]jm3505@cc.hirosaki-u.ac.jp